元ヤンでシングルマザーのあゆみ。
男勝りを演じて強く一人息子を育ててきたその平穏な生活はふいに終わりを告げる。
排便姿を覗きみる息子が目覚めさせていく変態によって・・
ミチッ
ブリィ

俺が、いや俺達親子が堕ちてしまった始まりはある日に前触れもなく起こった。
帰宅すると母がお腹を抱えてうなっていたのだ。
ぎゅるるる
「あぁ・・やばっ、イテテテっ！」
「ん、母ちゃん、どうした？」
「なんか、当たってみてぇでさ、腹が・・超イテぇんだよ・・」

「そんなに痛いの？」
「このあたしが痛がるぐらいだぞっ！・・っテテテッ」
「そんなにひどいなら病院いく？」
「まっ、間に合うかよ！もう駄目・・ちょっと行ってくるわっ！」
「えっ、どこに？」
「トイレだよっ！言わせんな！」
グギュルル〜

本気で辛そうにトイレに向かって駆け出した母が少し心配になった俺が後を追うと、トイレのドアは開け放たれたままになっていた。
よほど焦っていたのだろう。
更に心配になった俺は悪いと思いつつもそっと中を覗いた。
そこには便器に跨り苦悶する母ちゃんの姿があった。
「はぁはぁ・・・やべー、すげえの出そう・・・」
ん゛ん゛ん゛っ!!

「来たっ、きたきたぁ！すごい糞っ出しちまうよぉぉ！」
母ちゃんが叫ぶと共に肛門がムリッと盛り上がる。次の瞬間、下品で汚らしい排泄音を鳴らしながら大量の糞が次々と肛門から排出されていく。
んん〜
あっ
だめぇえっ
ぶぼっ
ぶぶっ
その姿を見た俺の中からは母親を心配する気持ちは無くなっていた。いつの間にか股間は硬く勃ちあがって鼻を突く耐え難い母ちゃんの糞の悪臭にさえ興奮を覚えていたのだ。

それから
数日後・・・

「なぁ、買いもん行くけど一緒に行くか〜？」
「い、いやいやっ、俺はいいよっ！」
「ふ〜ん、珍しいね・・・」
ギョッ
俺はあの日以来、母ちゃんを避けていた。妙に意識してしまっていたのと、母親の排泄で興奮してしまった自分の中の変態性を認めたくなかったのかも知れない。

「お前、なんか最近おかしいよな？」
「気のせいだろ？俺、全然普通だし・・」
「・・・見たろ？」
「え・・・はっ？な、なにを？」

「あたしが腹痛くて・・あれした日。心配で見にきたんだろ？」

「う、うん。まあ・・」

「あれから、なんかお前の態度おかしいし・・。しっ、仕方ねぇだろ！女だって母親だって、出るモンは出るんだよ！そんなことで軽蔑されたってどうしていいか分かんねえよ！」

俺の態度が知らず知らずのうちに母ちゃんを傷つけてしまっていた。違うのに・・本当のことを言えない理由があったんだ。

逆に俺が軽蔑されるから。でも母ちゃんが傷つくくらいなら。

「母ちゃん、違うんだ・・俺は・・」
「言わなくていいよ！母ちゃんだって恥ずかしいんだぜ、臭いだって量だってあんなによ・・息子に見せるもんじゃねえよな・・はぁ・・」
「違うんだよっ！」
「えっ？」
「あの日、母ちゃんが糞垂れてるとこ見て・・俺興奮してた！なんでか、めちゃくちゃ勃起までしてて・・。母親がうんこしてるとこで興奮するなんて言えるワケないじゃないか！それに・・それからなんか母ちゃんのこと妙に意識しちゃって・・」
「おっ・・お前・・それ・・」

「お前、実の母親に・・しかもトイレしてるとこでって・・凄すぎだろ・・」
「ごめん・・軽蔑されて当然だよね・・」
「い、いやさ、なんてゆうか女としてはエロい目で見られるのはちょっと嬉しいっていうかなんちゅうか・・・」

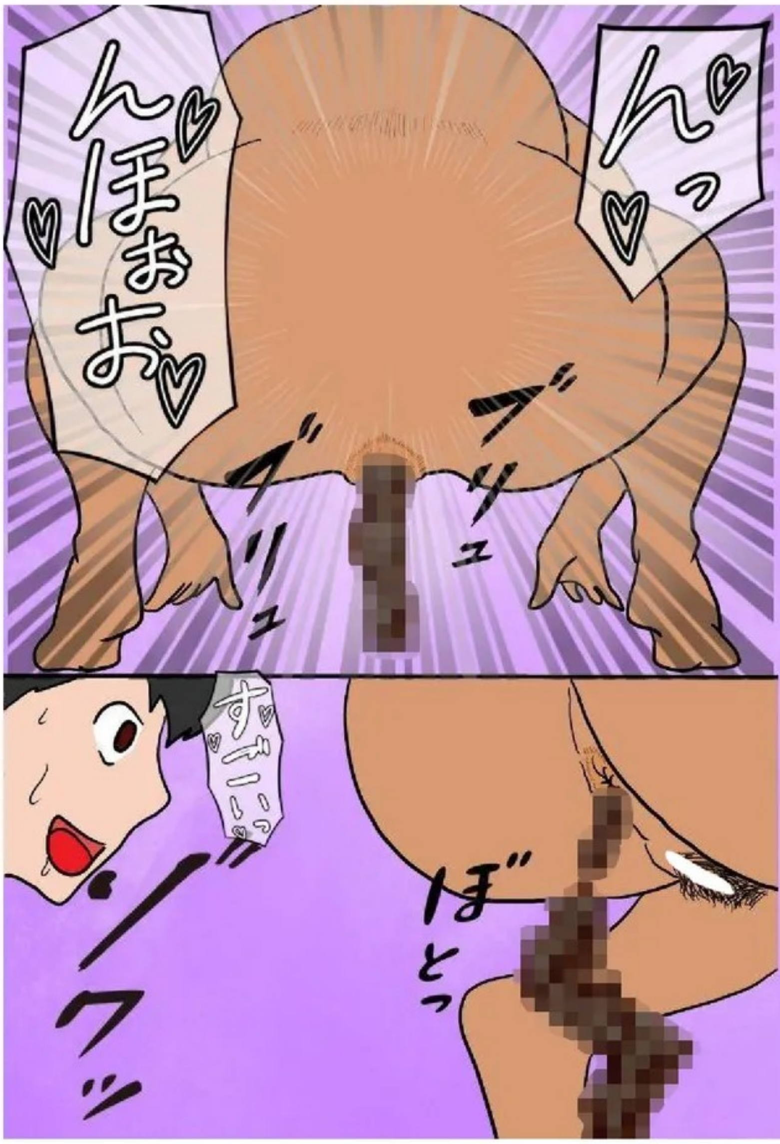
「そ、そうなんだ！良かった、俺母ちゃんに嫌われるのが怖くてさ。あの時のこと・・頑張って忘れるからさ・・」
「頑張らないと忘れられないくらい・・興奮したのかよ？」
ドキドキ♥
かぁあああ
「うん・・すげぇエロくて・・・俺あれからずっと一人でする時もあの時のこと・・」
「や、やべぇこと言うなよ！・・ほ、本当はもう一回見たかったりするのかよ？」
「え？み、見たいよ！母ちゃんトイレ・・」
「は、恥ずかしいから・・小便でいいか？」

そういうと母ちゃんはパンツを脱いで上着を捲った。肉感的なメスの身体にたちまち俺のチ○ポはバキバキに勃起する。
「す、すげえ！母ちゃんエロすぎるよ・・」
ブルブル
ブシャアア
ガクガク
「き、今日だけ！小便だけだからなっ！」
「わ、分かったよ！早く、早く小便出してみてよ！」
「あぁぁっ・・恥ずかしくて変な気持ちになっちまうじゃないか☒さぁ、よく見ときなよっ！」

「母ちゃんっ、母ちゃんの小便っ！チ〇ポ痛いぐらい勃起するよぉ！」
「ば、バカぁ！自分の母親の小便でそんなにしてっ、変態バカ息子っ・・満足したかい？」
「俺っ、母ちゃん俺！やっぱり母ちゃんのうんこが見たいよ！もう一回だけっ！お願いだから見せて欲しいんだっ！」
「もう・・本当にバカで変態なんだから。女がそんな風に頼まれて断れるワケないだろ☒」
ガクガクガク
はぁ♡
はぁ♡
ポタ
ポタ

「母ちゃん、普段は便秘だから・・コレしてくれるかい？」
「これ、浣腸？どうすればいいの？」
むちっ
むちっ
「先っぽ、母ちゃんのケツの穴に差して・・」
「こ、こう？これでいいの？」
ドキドキ♥
「そう、それでいいんだよ。そしたら、そのままチューって液入れてぇ・・」

「はぁはぁ・・じゃ、じゃあ、行くよっ！」
「あ・・あぁぁぁっ！浣腸っ来てる!?」
「す、スゲっ、俺、自分の母ちゃんに浣腸ブチ込んで糞出させようとしてるんだね・・」
「んんんっ、そ、そんなエロいこと言われたらぁ・・あっ、出る!?限界っ！糞出そうっ！息子の前で糞出ちゃううぅぅ！」
ブルブル
んぁあぁ♡
ビクンッ
!?
チュウゥ

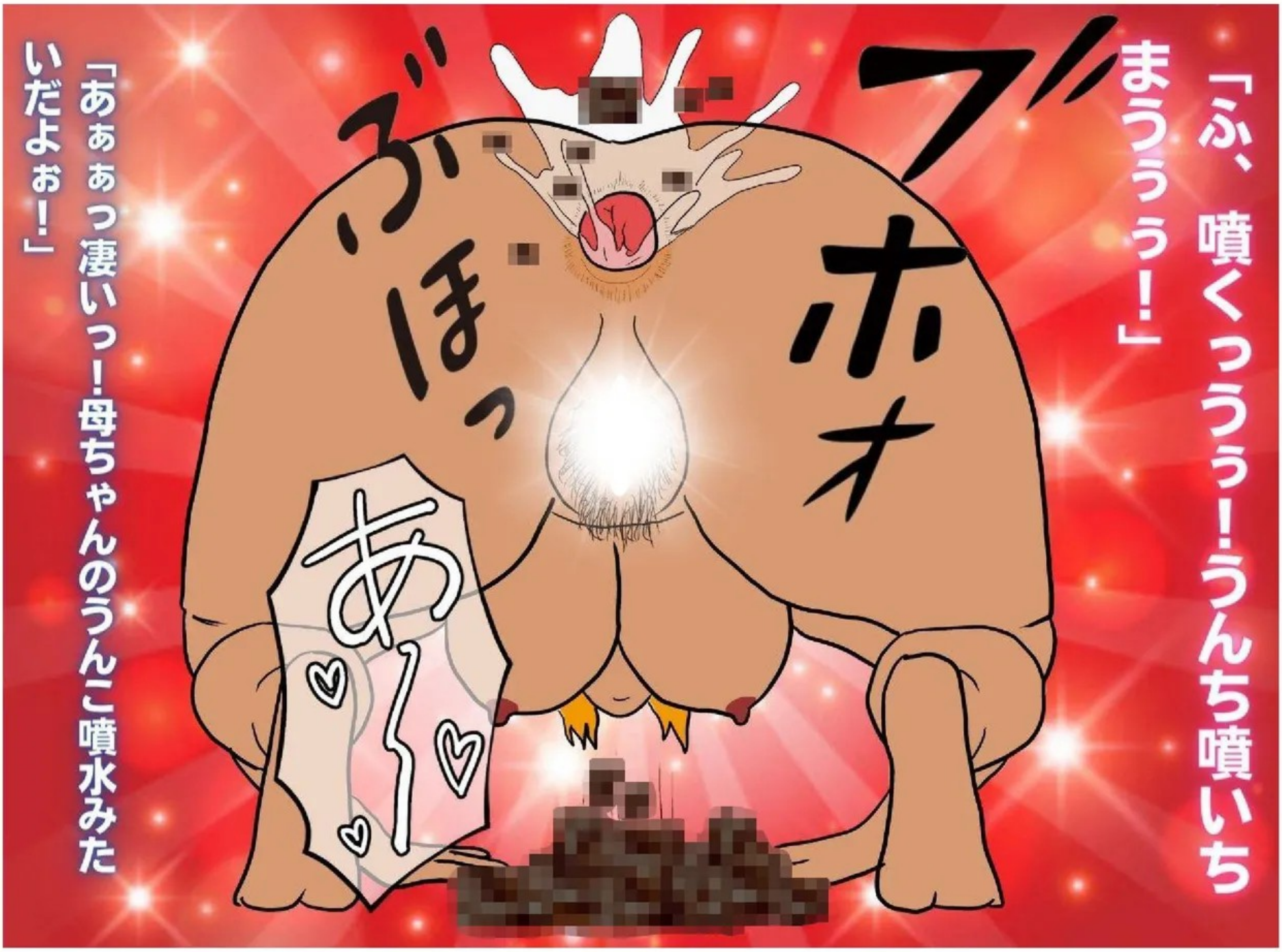


「見てぇ！見ろぉぉ！母ちゃんのケツ穴からブリブリうんち見ろぉぉ☒」

「すごい！すごいや！母ちゃんのケツから汚い糞が沢山出てくるっ！」

「恥ずかしいぃぃぃぃいん、全部っ、全部出していいっ⁉」

「出せっ！母ちゃんもっとうんこ出せぇ！」


「ふ、噴くぅうぅ！うんち噴いちまうぅぅ！」
ブボォ
ぶぼっ
あ〜
「あぁぁっ凄いっ！母ちゃんのうんこ噴水みたいだよぉ！」

!?
シコシコ
「はぁ・・はぁっ・・・⁉な、なにしてるんだい⁉」
「母ちゃん、もうちょっと、もうちょっとそのままでっ！」
「あ、あんた、母ちゃんのうんちでそんなに硬くして・・堂々と母親の前でシコって・・」
「あんなに凄いの見て・・我慢できないんだ！このままシコらせて！許してよ、母ちゃん！」

「おっ、女の前でオナニーなんてしてんじゃないよ！男なら男なら・・・」
ゾクゾク
パクッ
はぁ♡
はぁ♡
「目の前でぽっかり開いた母親のケツ穴に突っ込むぐらいの度胸見せてみなぁっ」

バスッ
おほーッ
「かっ、母ちゃんっ!犯ってやるっ!母ちゃんのケツマ〇コ犯るからなぁっ、オラぁっ!」
「おうぅうっ!!!犯られたぁぁんっ、息子のチ〇ポが糞まみれのケツにズボって来たぁぁ!」
ズバンズバン
うあぁあっ
あんッ

「母ちゃんっ、凄いねっ！俺たち親子でケツ穴交尾してるんだよっ？」
「こっ、交尾じゃないからっ！け、ケツ穴にチ○ポ突っ込まれてるだけっ！セックスじゃないわよぉぉ！」
「意地張るなよ、実の息子のチ○ポでケツの奥、ゴリゴリ抉られて気持ちいいんだろ？」
「ひぃぃいいっ、きっ、気持ちぃいい！糞まみれのケツ穴相姦気持ち良すぎるッう！」
「可愛いよ、母さん・・・ご褒美だ！」
バスッ
バスッ

「おらっ、糞塗れのケツ穴っ、息子精子で受精しろぉぉぉ！」
どびゅ
あ〜〜
「あ〜☒肛門の中、あっついいぃぃぃ☒ケツ穴で息子の赤ちゃん孕んじゃううう☒☒☒」

「ごめんなさいぃぃぃ！ケツ穴精子でアクメしてオシッコ漏れるのぉぉぉ！」
ブシャアア
!?

「はぁはぁ・・・母ちゃん・・・」
「いやらしい子だよ・・母ちゃんをこんなにして・・」
「ん?ど、どうしたの?固まっちゃって・・・」
「う、うるさいっ、今抜いたらまた出ちまうんだよ!」
「いいよ、母ちゃん。俺母ちゃんも母ちゃんの糞も大好きなんだから☒」

「ほら、抜くよ母ちゃん」
「いやぁん、駄目ぇ！」
あっ
ブホォ
「おほっ、すっげえ糞っ！」
「恥ずかしいぃぃぃ・・・」
「チ〇ポがくっさい糞に包まれて暖かいよ母ちゃん」
「母親にここまでして・・・責任取ってくれんだろ？」

「責任って？」
「母ちゃんのこと・・これからも可愛がってくれるかい？」
「当たり前だろ。大好きな母ちゃん。これからは俺を悦ばせるケツ穴糞奴隷にて可愛がってやるからね。」
「・・はい☒いっぱい可愛がってください☒」

母ちゃんの排泄物で興奮してしまった俺を受け入れた母ちゃん。
血の繋がりというのは凄いもので、母ちゃんもまたそういう行為に興奮しのめり込んでいった。
いや、母ちゃんが隠れた変態性が俺に遺伝していたというのが正しいかも知れない。

こうして俺たちは親子というもっとも近くに居る相手を性癖を満たす最高のパートナーにすることが出来たのだ。

母子家庭の俺たちを止める障害は何もない。
欲望のままに毎日毎晩行為に及ぶ。

元ヤンで気の強かった母ちゃんは笑えるほどに可愛らしく従順になった。
彼女の心も身体も・・いや身体から放出されるものでさえ全て俺のものになったのだ。

「すぅ〜・・・はぁっ、くっせぇ☒」

「いやぁぁん☒おなら、そんなに嗅がないでぇぇ☒」

「母ちゃん、もっと、もっと俺のために屁こいてみろ!」

「だめぇ・・力んだらもっといろんなもの出ちゃうからぁぁん」

「いろいろってなんのこと？」
「あっ、そ、そこぉ・・親子でオマ〇コはだめよぉぉ・・」
「じゃぁ、早く。早く俺のために出してよ。喉が渇いてるんだ。」
「う、うん、分かったから。待っててね・・」

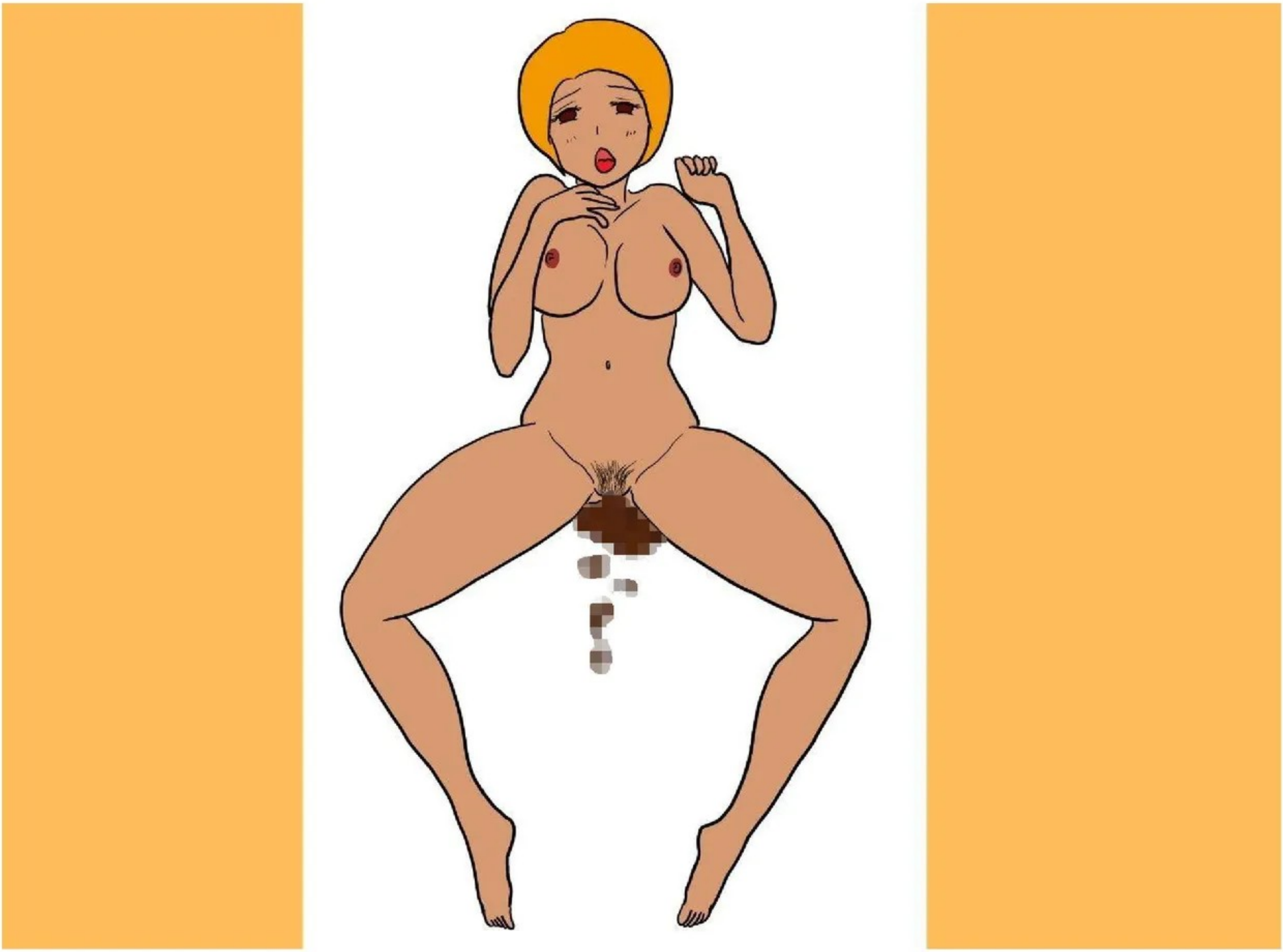
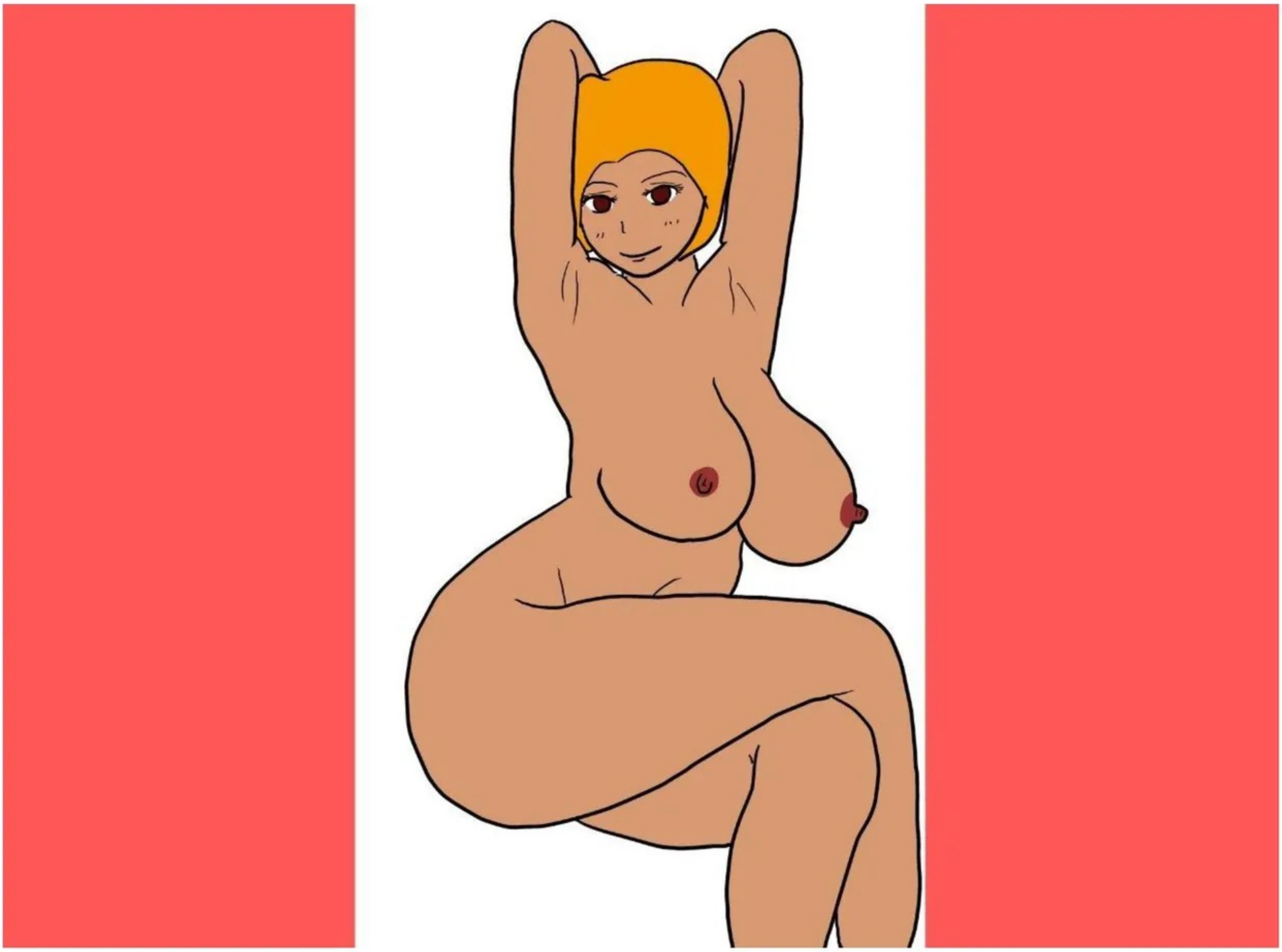
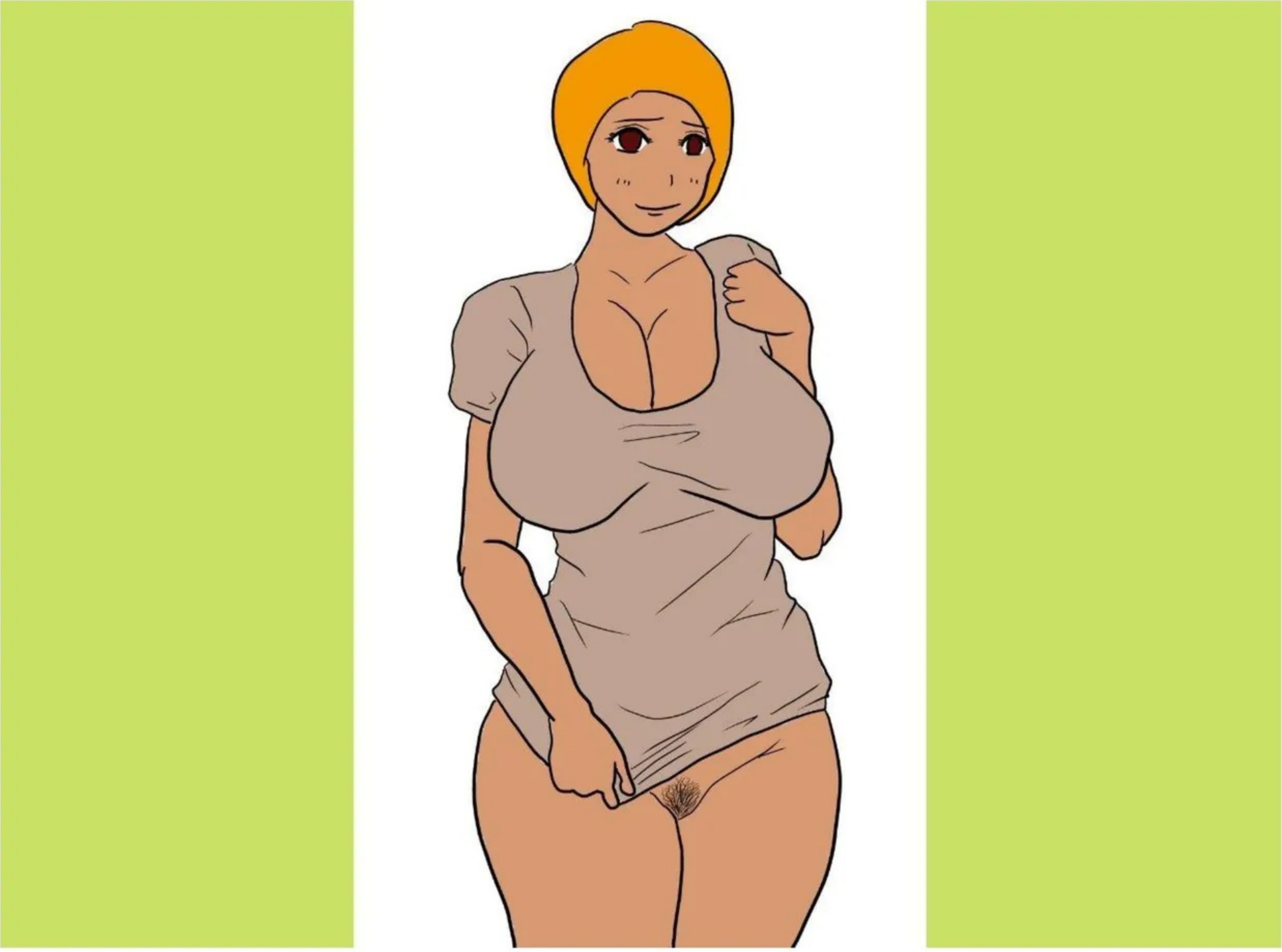
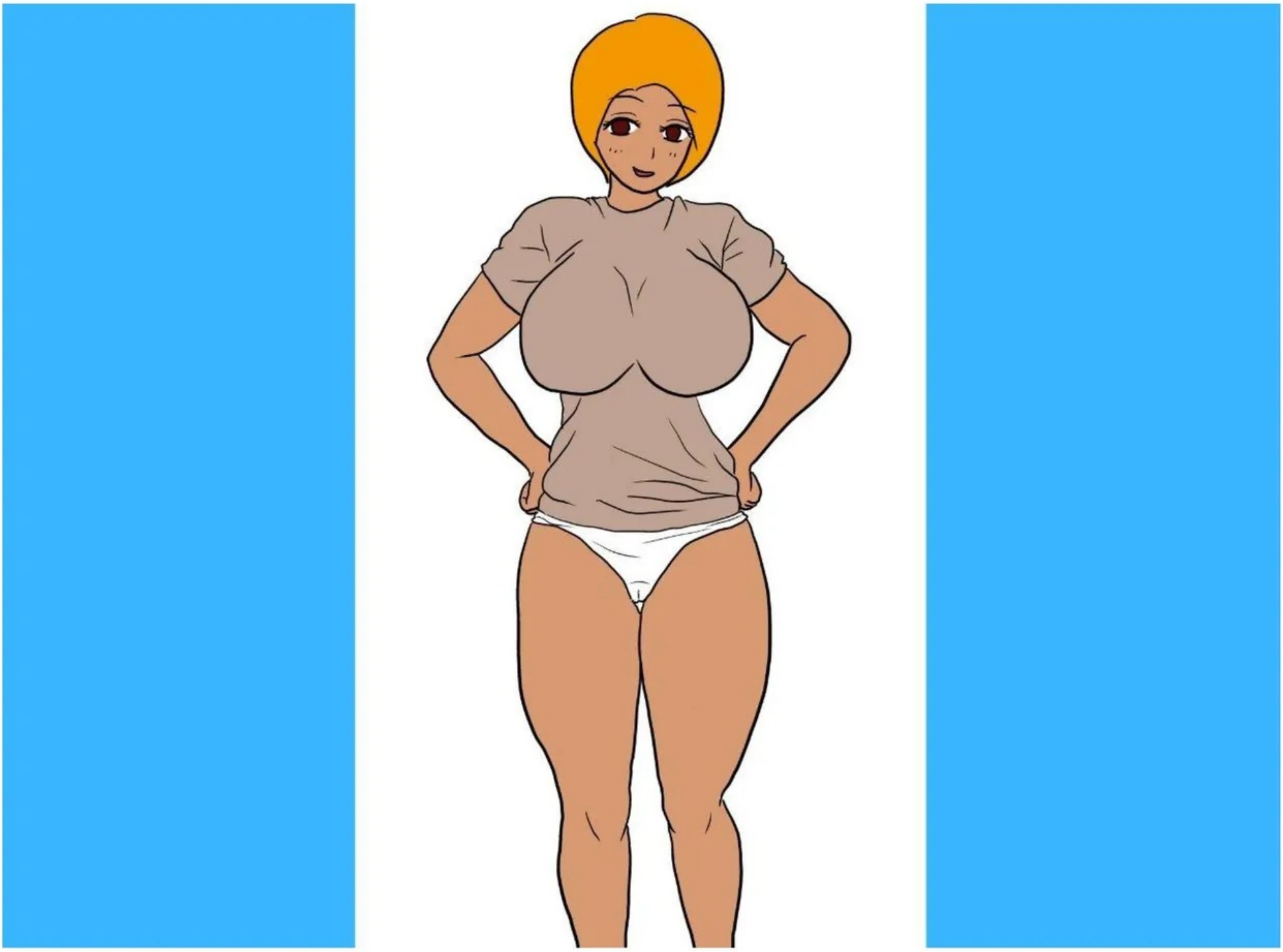
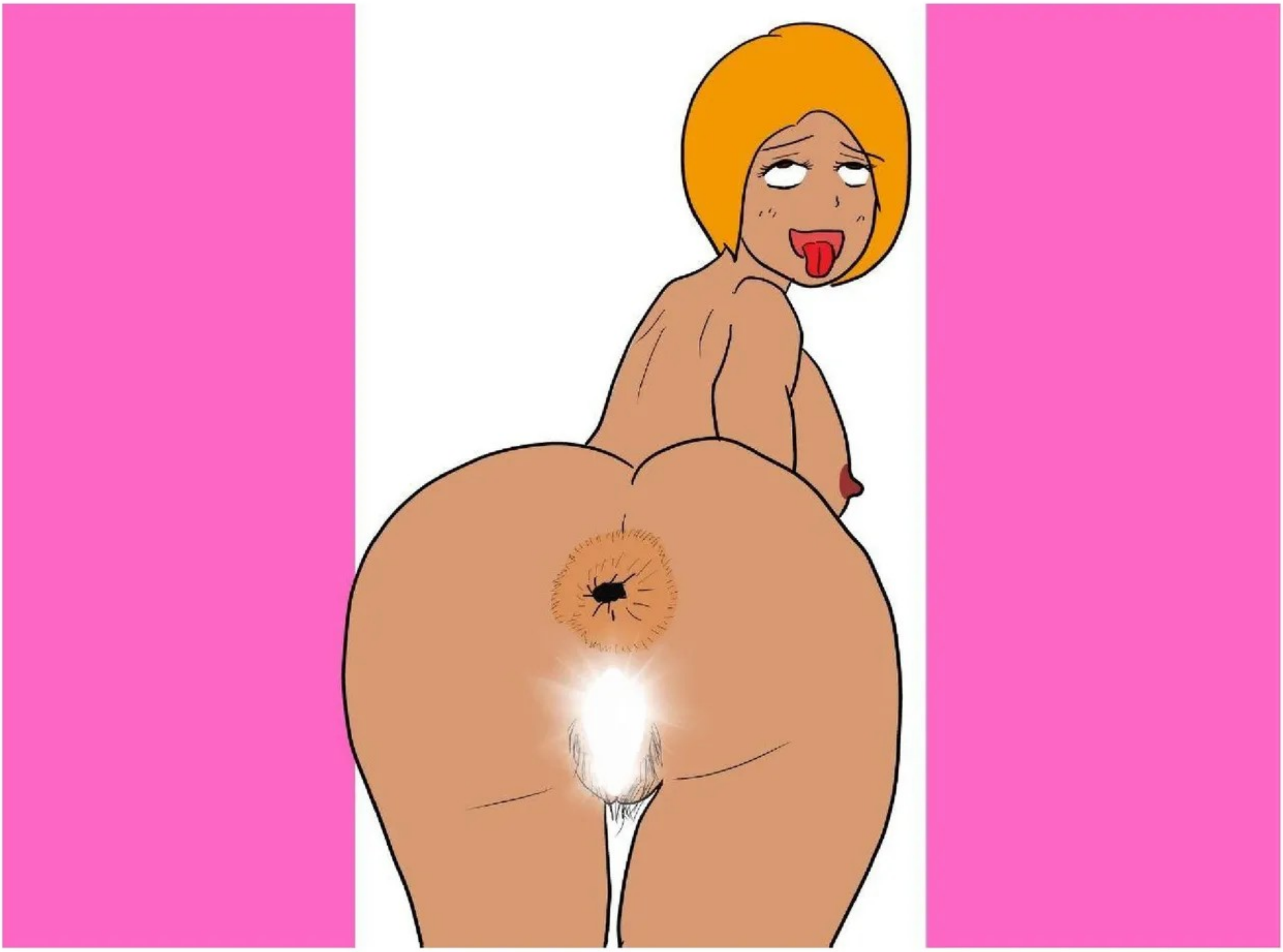
「んぐっ・・んっ・・ん・・しっこ!おいしいっ母ちゃんのおしっこ☒」
「あぁぁ・・そんなにぃ飲み干さないでぇ」
「はぁはぁ・・嬉しいんだろ?息子に小便ぶっかけて。」
「あぁいやらしいぃぃ・・ドキドキするのぉ♡」
キュン♡
ブシャァァ
はふ♡
はふ♡

「ほら、母ちゃんケツ出せよ、待ってるんだろ？」
「はいぃぃ、お願いしますっ♡」
「大好きな息子チ○ポに糞ぶっかけてみろよ」
「んっ、んっ、すぐっ、すぐ糞出ますっ！」
だめぇぇぇっっ♡
ひっ、イィいいいい〜〜♡
チュウウウ

ブリュ
ブリュ
んふぅううんんっ
「あ～あぁぁぁ！息子チ〇ポにうんちひっかけちゃうううううう！」
「あぁぁぁ！暖けぇ母親糞っ！最高だぁぁ！」

「すげぇ量の糞っ、俺の胸にまでひり出すんだな！」
「ご、ごめんなさいっ、うんち止まらなくてっ・・・」
ほかほか
「・・か、母ちゃん！俺に母ちゃんの糞食わせてくれよ！母ちゃんの糞食って、母ちゃんと一つになりたいんだ！」
「う、嬉しい☒そんなにまで母ちゃんを好きでいてくれるのねぇ☒」

「愛してるっ、息子だけど愛してるのぉ！
母ちゃんの全部あげる☒母ちゃんのうんち
で母ちゃんの全部受け止めてぇぇぇ！」
俺の口の中に物凄い便臭と苦みが拡がった。ああ、これ
が母ちゃんの味なんだ。俺は口いっぱいに母ちゃんの愛
を頬張って飲み込んだ。
一生愛し合って暮らそうと心に決めて。
ジワッ
ドキドキ♥
ブリュ
ブリュ

愛し合う俺たち親子はまるで夫婦のように毎日を送っている。
「あゆみ、晩御飯はまだ?今日は何?」
「うふふ、今用意するわあなた☒・・またカレーで良いかしら?」
「当たり前だろ、俺はあゆみのカレーが一番好きなんだから。」
「嬉しい☒ずっと・・大好きよ、あなた☒」
◆おわり◆
ぼとっ
ぼとっ

おまけイラスト